

心を合わせ 一手一つに



おちばから遠く離れたブラジルでも、一手一つにおつとめを勤める(於:眞伯教会)

真朋

発行所
天理教芦津大教会
〒546-0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話 06 (6702) 1980
FAX 06 (6700) 1854
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所 天理時報社

心を合わせ頼もしい道を作りてくれ。
あれでこそ真の道であると、世界に映
さにゃならん。
明治35年9月6日

『天理教教典』第3章「元の理」には、それぞれ別の方角から引き寄せられた個性の異なる道具衆が、親の心に溶け込み、人間を創造する様子が描かれています。そこには、自分の都合や思いは脇に置き、素直に親神様の思いに沿いつけること、そして一手一つに心を合わせることの大切さが示されています。

時に私たちは「自分が絶対に正しい」と、自らの意見を強く主張することがあります。その結果、相手の言い分に耳を貸さなかったり、意見の違う相手に不足をしたり、一手一つに繋がらない行動を取ってしまうことはないでしょうか。親子や夫婦、兄弟姉妹でも、皆それぞれに個性があり、考え方も違います。他人ならなおさら、意見が合わないことも多いでしょう。そうした相手の立場や考え方にもしっかりと心を寄せ、互いに立て合って、たすけ合うことが、陽気ぐらしの世界へと繋がっていくのではないのでしょうか。

間もなく年祭活動が始まります。まずは自らの姿を省みて、感謝と慎みを忘れず、周囲に心を配って、互いに立て合いたすけ合う、一手一つの喜びの姿を世に映していきましょう。

正面四方

半世紀も前のこと、「戦争を知らない子供たち」という歌が流行した。「戦争が終わって僕らは生まれた戦争を知らずに僕は育った 大人になって歩き始める 平和の歌を口ずさみながら」。けれど今この瞬間にも、世界では戦争の中で生まれ、戦争の中で育たねばならない人たちがいる。実は戦争はまだ終わっていないのだ。

どこであれ、誰も望みもしないのに、どういう力学でそうなるのか筆者には分からない。けれども、争うという行為が、人間誰もが持つ本性の一つであるのなら、祈りの心で自らのそれを覆いつくしてしまいたい。世界中の多くの人々が、連日配信される映像に心を痛め、己の無力を恥じるのだと思う。

だからこそ、この世には互いに立て合いたすけ合うよろづたすけのつとめとさづけ、そして祈りがあることを伝えたい。そして戦火に傷つき、行き惑う人々に寄り添いたい。

(眞)

《5月次祭 挨拶》

日々の真実の積み重ねが 御守護に繋がる

大教会長 井筒梅夫

皆様方には、日々御恩報じの道を勇んでお通리くださいまして、誠にご苦勞様でございます。まだまだ出にくい状況の中をご参拜くださり、只今共々に5月の月次祭を勇んで勤めさせていただけましたことは、大変有り難い次第です。

大阪・船場の道修町（どしようまち）という所をご存じでしょうか。ここは江戸時代から薬の町として栄えてきました。日本で商われる薬はいったん道修町に集まって、品質と目方を保証されて全国に流通していきました。武田薬品工業や塩野義製薬、小林製薬、住友ファーマなど、その他にも大手の薬品会社がこの道修町に本社を構えています。また、現在の薬科大学に相当する薬学専門学校が日本で初めて設立されたのも道修町です。

明治15年の頃、この道修町で薬問屋を営んでいた人の話であります。この店の主人は大変慈悲深い心の持ち主でした。一日の商売が終わって売り上げの勘定をするときに、二銭銅貨（当時の一銭＝約200円）を別に包んでおいて、翌朝に店の前を通る物貰いに与えていたようです。これが噂になって、後にこの薬問屋が店を開けるころには、生活に困ったたくさんの人々が店先に並び、主人は前日の売り上げの中から二銭銅貨を一人ひとりに渡していたといひます。

あるとき、この主人が商売のために四国か九州へ船で向かったところ、船が遭難して、ただ一人無人島に流れ着いて一命を取り留めました。命は無事でしたが、食べる物がありません。ところが夜が明けると、波打ち際に魚が打ち上げられていた。これを食べて飢えを凌ぐことができました。翌日も飢えを凌ぐだけの魚が上がっていました。毎朝決まったように魚が上がリ、その日その日を凌いでいるうちに救助の船が来て、無事に大阪に帰ることができたのです。

その後、その主人は天理教に入信して、お屋敷へ帰り、初めて教祖にお目通りをしました。そのときに教祖が、「いつも私の子供をたすけてくだされてありがとう。神は心から礼を申します。そしてこの間はそれのお礼をちよつとさしてもらいましたなあ。」と、こう仰つたんです。

この話は、教祖を直接知る大勢の古老から話を聞き取られた、教祖伝研究の第一人者である高野友治先生が紹介している話です。ここで仰る私の子供とは、二銭銅貨をもらった人々を指しますが、もちろんこれを与えた薬問屋の主人も教祖の子供であります。つまりこの話は、難儀をしている弟や妹に兄が手を差し伸べている話です。教祖から見れば、一れつ兄弟姉妹がたすけ合っている姿に他なりません。これを教祖が喜びくださり、この真実を受け取っておられるんです。更にこの話で注目すべきことは、薬問屋の主人は、毎日毎日手を差し伸べ続けた点であります。

おさしづに、
危ない事、微かな理で救かるは日々の理という。

と教えていただくように、たとえ些細なことでも、日々に理を積

明治26年4月29日

むことで危ないところをたすけていただけるのです。これが日々の理です。

この主人は、たすけ心から身を削って、売り上げの中から毎日毎日二銭銅貨を与え続けたおかげで、遭難したときにその日一日を越せる魚を毎日お与えいただいて、命の無いところを御守護いただいたのであります。たとえ些細なことであつても人のために心を使い、お借りしているこの身体を使わせていただく。その努力をすることの大切さを、この話から教えていただいているように思います。この日々の積み重ねが、いざというときの御守護に繋がるのです。

来年から年祭活動が始まりますが、それまでにあと220日余りあります。この一日一日を徳を積んで大切に通ることが、年祭活動に臨む理づくりになります。年祭活動を来年に迎える今の旬を、教祖のひながたに目を向けて、教祖から教えていただいている教えを素直に実行して、日々に徳を積み、理づくりに勤しむ信心の道を歩ませていただきたいと存じます。

どうか、心勇んだご丹精をお願いいたしまして、今月の挨拶とさせていただきます。

なお、来月の月次祭には世話人・島村廣義先生がご巡教くださいますので、どうぞ誘い合わせてご参拝くださいますよう、重ねてお願いいたします。本日の月次祭、大変ご苦労様でございました。

(要約)

立教百八十五年 五月月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長 井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には陽気ぐらしを楽しみにこの世人間をお創め下さり、絶えざる御守護を以て一れつ人間をお護り下さいますと共に、私共をこの道にお引き寄せ頂きますして、教会長、ようばくとしてたすけ一条の御用にお使い下さいます親心の程は、誠に有難く勿体ない限りでございます。私共は思召にお応えさせて頂けるよう、日々胸の掃除に励み、おたすけと丹精に真心を尽くさせて頂いておりますが、その中にも今日の吉日は、おちばよりお許しを頂きました尊き日柄でございますので、只今から役目にあずかる者一同、心を揃えて座りづとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、五月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には、今日を大切な一日と参り集いました芦津の道の子供達が、日頃賜る御恵みに御礼申し上げ、おたすけの心で共にお歌を唱和する真実の状を御照覧下さいまして、親神様にもお勇み下さいますよう御願い申し上げます。

私共をはじめ、芦津の理に繋がる教会長、ようばくは、元のちばにしつかりと心を繋ぎ、ちばの理を頂く教会を足場に心の成人に励んで、今日の時旬の道の歩みを明るく勇んで進ませて頂く所存でございます。

何卒、至らぬ点、届かぬ処は幾重にもお仕込み下さいまして、思召し下さる神人和楽の陽気世界の実現のために、教祖の道具衆として一手一つに心勇んで働かせて頂けますよう御守護の程を、一同と共に慎んで御願い申し上げます。

《5月月次祭 神殿講話》

教祖年祭に向け 一人ひとりが努力を積み重ねよう

役員 加世田 洋

おたすけ心を実動に

今年1月16日の夜中、突然携帯が鳴り響き、驚いて起きると、津波警報が発令され避難するよう防災無線がかかっていました。テレビを見ると、日本からはるか8千キロも離れた南太平洋のトンガ諸島付近で発生した海底火山の噴火による津波とのことでした。真夜中でもあり、教会で約1時間ほど様子をみましたが、もう大丈夫だろうとまた寝ることにしました。

結局津波警報はその日の午前中まで続きましたが事なきを得ました。その後、この津波警報によって、「避難する車で交通網は麻痺状態」「トイレ等の防災用の備えの問題」

「高齢者の多くが手助けがないと避難できない状況」など、さまざまな問題が浮き彫りとなり、個人の防災意識を高めると共に、地域における協力が大切だと言われるようになりました。そこで教会としてどのようにすることが良かったのか、話し合いをしました。

津波警報の場合は高台へと避難することが第一ですが、それが困難な人は、少しでも高い丈夫な建物へと避難することが求められます。そこで今後同じような事態が起こった際は、地域の方が避難できるように、大島分教会で受け入れをさせてもらおう、ということになりました。また、持っていく物や避難場所を書いたチラシを作成

し、高齢者宅へ配布する等、話し合いをすることで、できること、やるべきことが分かってきました。

教会では毎月、地域への戸別訪問やリーフレット配布等を実施しています。コロナ禍になってから中止にする期間も多くなってしまいました。しかし今の社会状況は、身体の不調はもとより、心の不調も深刻化しており、国内における自殺者は増加傾向にあります。コロナ禍によって苦しんでいる人、助けを求めている人が身近にいないだろうか？ この度の津波警報は今の状況の中だからこそ、しなければならぬことに気付くきっかけにもなりました。「誰かに支えられている」「誰かが気に掛けてくれている」。そういった思いやりの心、優しい心を伝えていくこと。それが土地所の教会の役割でなくてはならないと思います。

ご本部では、昨年からは毎月1日にコロナ禍の終息を願ってお願い、3月1日をもって終了となりました。

た。この事について内統領・宮森与一郎先生は、「次の段階へ進む時期がきているように思います。それは、コロナによって断ち切られた心のつながりを取り戻す、おたすけの行動を決心する時期であります」とお話しください、これからはようばく一人ひとりのおたすけの実動を親神様にお受け取りいただくことによって、御守護を頂戴させていただこうと仰せくださいました。引き続き、日々のおつとめでお願いをすると共に、ようばく一人ひとりのおたすけの実動を推し進める旬です。

教祖を感じて

おさづけの取り次ぎを

ご本部春季大祭の神殿講話において、表統領・中田善亮先生は、「コロナの事情のただ中だからこそ、全教ようばくは、もっとおさづけを取り次がせていただかなければ、親心にお応えできないと思うのです」と、節の中だからこそ、おさづけの取り次ぎを強調され



ました。

これは、あるようばく家庭で生まれ育ったAさんの話です。結婚後は関西に住み、相手の家は信仰のない家庭でした。元々Aさんは膠原病こうげんびょうの身上があり、調子が悪くなると数日寝込んだり、時に入院が必要になったりと、症状の変化が激しい身上でした。そうしたときに、実家や教会にも連絡してくれましたが、離れているためすぐにおたすけに行くことができず、お願いづとめを勤め、大教会に帰らせていただいた際におたすけに行っていました。

ある日、入院になったと連絡があり、さらに主人の父親にガンの身上を見せていただいたとのこと、とても落ち込んだ様子でした。そこで改めて夫婦でおたすけに行き、病院でAさんにおさづけを取り次ぎ、今回のお父さんの身上も通している話をしました。その中で、やはり心定めが大事だという思いから、「ご主人に別席を運んでもらえるよう話をしたらどうか」と伝えたところ、「分かりました」と言ってくれました。

それから数日後にメールが届き、「思い切った話をしたら、主人とお母さんが行ってくれることになりました」という返事でした。主人だけでなく、お母さんも行ってくれることになりました。

願書を準備して送付すると、初席を運んでくださり、それから1年で2人揃っておさづけの理を戴くことができました。そしておさづけの理を戴いた直後に、教祖殿でご主人に「早速ですが、この場でAさんにおさづけをしてもらえ

ますか」と言うと「いえ、とてもできません」と言われましたが、「ぜひしてください」と、取り次ぎ方を説明し、取り次いでもらいました。何ともしどしいおさづけでしたが、一生懸命にしてくれました。

続いてお母さんも取り次いでくださいました。2人がおさづけを取り次ぐ間、Aさんはずっと涙を流していました。

帰る道中、Aさんは「これまで病状が悪くなる度にすごく不安でしたが、これからは安心です。すぐにおさづけをしてくれる家族が身近にできたので」と嬉しそうに言ってくれました。おさづけを取り次いでくれるようばくが身近にいるということは、有り難いことなんだと考えさせられる言葉でした。

さあ／＼これまで住んで居る。何処どこへも行てはせんぞ。日日の道を見て思やんしてくれねばならん。

明治23年3月17日

教祖は私たちにとって決して遠く離れた存在ではなく、いつも身近におられ、御存命でお働きくださっています。日々に教祖を感じ、おさづけに心を込めて、まずは身近なところから積極的に取り次がせていただきたいと存じます。

信仰の喜びを伝える

あるようばく子弟と話をしたときに、「何かあれば『別席や修養科に行きなさい』と親に言われ、それが嫌で、天理教も嫌で仕方がなかった」と言います。その中、自身が大きな身上を見せていただき、言われるまま洪々修養科へと入科しました。「3カ月我慢して過ごせばいい」と始まった修養科生活でしたが、教理を学び、担任の先生や教養掛、また他の修養科生の方々と接し、人のために尽くす喜びを学ぶ中に「天理教は素晴らしい」と感じるまでに心が変わったそうです。修了時には「これからの人生は何らかの形で天理教の道に進んでいきたい。これからが私

の信仰のスタートです」と、話してくれました。その言葉通り、修養科修了後は、教会やいろいろな所でひのきしんに励んでいます。

この方は修養科に行くことによってお道の素晴らしさを感じるころができましたが、もし行っていなかったら信仰へと繋がることはなかったかもしれません。初めて信仰についた方には、相手に分かるように丁寧に伝えていくと思いますが、身近な者には「こうあるべき」という無理強いをしてしまっているのかもしれない。

をやごでもうくのなかもききたいも
みなめへく心にちがうで

五号 8

と仰せいただくように、特に身近な者ほど、分かるように丁寧に教え導いていかなければなりません。

また、

もう道というは、小さい時から心写さにゃならん。

明治33年11月16日

とにかく小さいときから共に手を取り話をしていくことが大切です。

今年も夏の「こどもおぢばがえり」は中止となりました。少年会本部はこうした状況の中「子供と一緒に教会へ参拝しよう」「子供と一緒にひのきしんをしよう」と教会や家族単位で信仰を伝えることの大切さを強調されています。

昨年の暮れに、大島分教会の育成を担当している部内教会長が、「来年はこどもおぢばがえりがあってもなくても、子供たちの団参を行いたい」と言ってくれました。その話を聞き、たとえ「こどもおぢばがえり」が開催されなくても、子供たちとおぢばへ帰らせてもらうことは大事である、として、今年ではできる範囲で帰らせてもらうと計画しています。

奄美大島からの帰参は船で鹿児島へと渡り、そこからレンタカーでの移動ですので、日数や費用もかかりますし、お世話する育成会員も人数と労力がいらす。しかし、これまでこうした団参が続けてこられたのも、参加した子供たちの喜ぶ顔と、そうした子供たちが

が次は育成会員の立場となって支えてくれる、成長の姿があるからだと思います。従来のやり方にとらわれず、今できることを工夫しながら一つ一つ進め、人数の多い少ないではなく、参加してくれる一人ひとりに向けて、真実込めてつとめさせていただきたいと思っています。

続いてあつてこそ、道と言う。続かん事は道とは言わん。言えようまい。明治39年5月21日「道は末代」と仰せいただくこの信仰の喜びを、間違いなく子、孫へと繋いでいきたいものです。

それぞれの足元で実動に励もう

来年から始まる年祭活動は、これまでと同じように勤めることはできないかもしれません。しかし親神様の御守護、御存命の教祖の御導きに変わりはなく、それぞれの立場でつとめていくことが大切です。

三代真柱様のお言葉に、「教会の内容を充実させる源は、

それぞれ教会につながる人々の自覚と行動と、それに加えて積み重ねる努力であります。

たとえ自分が所属する教会から離れた場所に住み、職業を持つておりましても、その自分が住む土地や職場でたすけ一条に励むならば、所属教会の内容を充実させている一員と自負すればいいでしょう。親神様はきつと受け取ってください。

教会内容の充実の律は、教祖ひながたの道であります。」

(立教159年秋季大祭神殿講話)と、ようばく一人ひとりが自分の足元でたすけ一条につとめることは、すべて教会の内容充実へと繋がると仰せくださいました。

世界にお見せいただく節を深く思索し、そこにこもる親の思いを悟り、日々に教祖の御心を訪ね、ひながたを辿る努力を積み重ねて「心づくり」「理づくり」に励み、各教会がより一層輝いていけるよう、共に勇んでつとめさせていただきます。 (要旨)

喜びの奉告祭

八代会長就任奉告祭

本津分教会

本津分教会（大阪市西区九条南）は、5月8日、大教会長夫妻をお迎えして、梶川芳

征八代会長就任奉告祭を執り行った。随行は井筒文夫役員。

本津の道は、中川文吉の熱心な信仰に始まる。明治12年の秋、中川が突然の眼病で失明せんばかりの重態となったが、井筒梅治郎様の熱心なおたすけにより、三日三夜のう



ちに鮮やかな御守護を頂き入信。本田を拠点に、にをいがけ、おたすけに奔走し、眞明

組結成に大きく携わった。

明治32年、教会設立と同時に初代会長に就任。九条の地に教えを伝え、今に至る。

記念撮影後の午前11時、梶川会長が祭文を奏上し、続いて大教会長が挨拶。「ちばと息一つに心を合わせ、陽気ぐらしの手本となる教会を目指してほしい」と励まし、最後に前会長夫妻の労を労われた。

おつとめを勤めた後、梶川会長が「初代会長はじめ先人先輩方のご苦勞の道を忘れることなく、しっかりとおたすけのできる教会にしたい」と決意を述べた。

その後、祝賀会。当日、参拝できなかった方々を主とした前会長夫妻を労うメッセージDVDを上映するなど、笑顔溢れるひとときを過ごした。参拝者は70名であった。

七代会長就任奉告祭

加津佐分教会

島原部属加津佐分教会（長崎県南島原市）は、5月15日、大教会長夫妻をお迎えして、小川正弘七代会長就任奉告祭を執り行った。

午前10時、小川会長の祭文奏上の後、大教会長が挨拶。

「本部という理あつて他に教会の理同じ息一つのもの。この一つの心治めにや天が働き出来ん。」とのおさしづを引かれ、おちば、親々に心を合わせる大切さを諭された。

陽気に勇んだおつとめが勤められ、御礼の挨拶に立った小川会長が「毎日、にをいがけにバイクで走り回っていた



父を見習い、自分もしっかり勤めさせていただきます」と

決意を表明。続いて小川喜道前会長が退任の挨拶を述べた。記念撮影の後、弁当と記念品を配布して解散した。

参拝者は70名であった。

教会長夫妻特別講習会

教祖年祭活動三年千日が始まるまであとわずかとなったが、これまでに会長として年祭活動を経験していない教会長夫妻を対象に、本部で「教会長夫妻特別講習会」が開催されている。

第1回は5月8日に開催。南右第2棟陽気ホールを会場に256名、芦津からも8名の教

会長、配偶者が受講した。

内容は、教祖百三十年祭時に熱心に取り組んだ教会のビデオを視聴し、本部員・松村登美和先生の講話。表統領・中田善亮先生の閉講挨拶の後、神殿に移動し、おつとめをして解散した。

受講生からは「年祭に対する心の置き所を改めて聞かせていただき、とても刺激になった」自分たちに何ができるかを、夫婦で具体的に考えて取り組んでいきたいなどの感想が聞かれた。

この講習会は9月中旬まで開催され、芦津からは計54名の教会長夫妻が受講を予定している。

学生生徒修養会・高校の部

8/8(月)～8/12(金)

(4泊5日 本部宿舎にて合宿)

○内容：教理レクチャー、ひのきしん、おてふり、レクリエーションなど

○受講御供：10,000円。受講当日に詰所でお納めください。

○申込方法：受講願書（天理教学生会のHPからダウンロードできます）と返信用封筒（保護者氏名、住所、郵便番号を記入、84円切手を貼付）、幣帛料（1,000円）を、学生担当委員会（詰所 木村・奥田）までご提出ください。

○申込締切：7月25日

※詳細は学生担当委員会（詰所 木村・奥田）までお尋ねください。

少年会荻津団野外練成会

少年会荻津団（加世田洋団長）は5月28日、さんさいの里でデイキャンプとして3年ぶりの野外練成会を実施し、少年会員29名、スタッフ22名、計51名が参加した。

当日はお天気にも恵まれ、午前10時より入所式を行い、少年会本部委員から「さんさいの里」についてのお話、続いて加世田団長より、「火・水・風の親神様の御守護に感謝し、たすけあいの心で自然を満喫し、楽しんでください」と話があった。

次に、参加者は各班に分かれて、フォートーリング、ネイチヤークラフト、ボルダリング、ラダーゲッター&モルックと、さんさいの里の自然を生かした野外プログラムを楽しんだ。



野外プログラム
「ボルダリング」



続いて、大教会長を囲んで記念撮影の後、

昼食のバーベキュー。

大自然の中で食べる食事は格別で、参加者も大いに喜んだ。午後から野外プログラムを

班ごとに楽しんだ。午後4時からキャンプファイヤーを行い、練習したキャンプソングや班ごとにゲームを披露し、楽しい時間を過ごした。そして、退所式をその場で行い、現地を後にした。

参加者からは、「自然の中で皆とたすけ合い、体を動かすことがとても楽しかった。また来年も来たい」といった声が聞かれ、キャンプを通して改めて親神様の御守護を体感した。

五月月次祭 祭典役割

五月月次祭 祭典役割	祭主	扨者	扨者	座りつとめ	前	後	在籍者一同
	大教会長	守田清一	奥田眞治	大教会長 瀧本眞二郎 今川政治 会長夫人 前会長夫人 奥田富美子	岩切正教 梶川和隆 葭内浩 瀧本基志枝 岡本たねよ 山埜こずえ	奥田正儀 花岡忠和 西本興正 山田秀子 竹内淳子 加世田陽子	
	指図方	賛者	賛者	吉田裕樹	立花善三	湯川正罔	
	献饌長 瀧本眞二郎	伝供					
胡三味線 弓線	井筒ちぐさ 今川和子 瀧本晶子	菅子木 太鼓 すりがね 小鼓	山本義範 岡島秀男 竹内義忠 山田弘 奥田徳博 川畑澄博	井筒文夫 井筒敏成 石川道夫	岩切正義 立花善文 瀧本耕四郎	岡本久昭 新居里実 村田光伸	
立花幸子	梶川りよ子 吉田幸子	木村真次 吉田裕和 西本義之 河端芳雄 浜田宣郎	石川健郎 梶川芳男 今川聖一 河合善洋 川畑正博 湯川正信				

青年会ひのきしん隊

青年会芦津分会（井筒敏成委員長）は、5月21日、6月11日におやさとふしん青年会ひのきしん隊日帰り隊に入隊。

5月21日は、7名の青年会員が入隊し、大麦畑で親神様、教祖にお供えされる大麦の収穫作業を行った。午後は、中山大亮青年会長様も共にひのきしんに出動され、芦津分会の会員にも親しくお声がけをくださった。

6月11日は、本年から実施されている夫婦、家族でのひのきしん隊入隊可能日ということで、芦津分会として初め



て、婦人会員、少年会員も共にひのきしん隊に入隊した。

作業は、大裏での田植え作業。入隊者は横一列となり、一手一つに田植え作業を行った。

参加者からは、「子供にとつて貴重な体験の場となり、同世代の家族と一緒にひのきしんができ、とても楽しく有り難かった」「会活動の枠を超えた新しい取り組みに感激した」などの声が聞かれた。

入隊者は、青年会員14名、婦人会員17名、少年会員24名、計55名。



学生参拝デー&新入生歓迎会

新入生歓迎会

芦津学生会（武波直輝委員長）では、毎月学生参拝デーを実施している。5月は参拝デーに併せて新入生歓迎会を実施し、大学生8名、高校生11名、学生担当委員8名が参加した。

5月14日、本部神殿に集まった参加者でおつとめを勤めた後、武波委員長が「今日は仲間と一緒に共に楽しみ、語り合つて親睦を深め、芦津に繋がる学生同士の繋がりを広める機会にしたい」と挨拶をし、西回廊で回廊拭きひのきしんを行った。

詰所に移動した参加者は、まず大広間で簡単な自己紹介をしながらゲームやレクリエーションで楽しみながら、交流を深めていった。

4班に分かれて昼食会を行い、和気あいあいとした雰囲気の中、親睦を深めることができた。

詰所に移動した参加者は、まず大広間で簡単な自己紹介をしながらゲームやレクリエーションで楽しみながら、交流を深めていった。

「夏休み子どもひのきしん」について

今年も親里での「こどもお

ちばがえり」が中止となり、この夏もそれぞれの国々所々で少しでも信仰の喜びを味わってもらいたいとの思いから、少年会本部より「夏休みこどもひのきしん」が提唱された。

取り組みの一環として、親里では7月26日から8月28日まで「ひのきしんセンター」が設けられ、ひのきしんの受付が行われる。そのほか、西泉水プール前広場や南右第2棟、天理参考館では帰参した子供たちが楽しめるような催しが用意されている。

また、教会や家庭において

子供たちが楽しみながらひのきしんに励むことができるよう、「ひのきしんカード」が各教会に配布されるので活用いただき、その中で神様のお話や信仰の喜びを大人から伝え子供と共に成人させていただく機会としてもらいたい。

なお「ひのきしんカード」

は、天理教少年会本部の公式

ホームページや公式

LINEからもダウン

ロードが可能で、

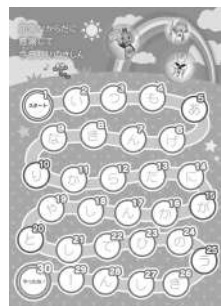
『リトルマガジン』

6月号にもオリジナル

シールとともに付

録として添付されて

いる。



事情はこび

立教185年5月26日お許し
大笠利分教会

任命

三代会長

元見健一 もとみ けんいち
68歳



鹿児島県立大島工業高校中退。昭和46年おさづけの理拝戴。昭和53年修養科修了。奄美大島で建設業を、東京、埼玉、横浜で型枠大工として勤める。また、大型特殊免許を保持し、トラックドライバールとしての経験もある。

就任奉告祭 6月12日

教務部報

教人登録

齊藤 涼子 (高 清)

立教185年4月19日

教人資格講習会第121回修了

山下 親助 (芦山都)

立教185年5月11日

修養科第969期修了

高井 貞夫 (大関門)

奥平 博一 (疏 宮)

立教185年5月27日

おさづけの理拝戴《4月》

奥田 和志 (周 宝)

初席《3月》

《1名》島原、島新、東大屋、

上有明、太美、尼崎

《順序運びより 6名》

※眞明629号に初席者の誤り・記載漏れがございましたの

で、再度掲載しました。

初席《4月》

《1名》甲 邊

《順序運びより 1名》

計 報

矢部川分教会三代会長(島原部属)

荒木昌治氏 (あらきまさはる)



令和4年5月26日出直された。享年93歳。

告別式は、5月29日岩切正

教・島原分教会長斎主のもと、

福岡県みやま市瀬高の葬祭場で執行された。

氏は、昭和4年12月27日大阪市生まれ。昭和26年修養科第120期修了、おさづけの理拝戴、同27年教人登録、同46年矢部川分教会三代会長に就任。

教会本部では修養科一期講師、大教会では詰員、修養科教養掛、布教推進員、別席推進員、福岡教区では山門支部長を務められ、地域においては、長きにわたり民生委員として貢献された。

生涯をおたすけに、信者の丹精に、親の御用にと、誠実を尽くされた。

中山大亮青年会長様御臨席
芦津分会総会

立教185年8月28日(日)
午前10時開会 於 大教会

項 目	初	の	修	教
名 称	席	お	養	人
() 内教会数		理	科	
大 教 会	(1) 9	6		
東 津	(23) 1	2		
吉 野 川	(29) 1	1	1	1
島 原	(16) 5			
日 方	(15) 3			1
稗 島	(7) 2			1
本 津	(2) 2			
始 良	(5) 1			
津 和	(12) 1			
門 司	(6) 1			
當 別	(6) 1			
大 島	(26) 1	1	1	
沖 縄	(3) 1	1	2	
尼 崎	(2) 1			
四 ツ	(5) 1	1		
大 冠	(2) 1			
島 下	(1) 1			
天 保	(3) 1			
青 山	(1) 1			
芦 浪	(1) 1			
甲 邊	(1) 1			
芦 華	(1) 1			
天 津	(1) 1			
入 江	(1) 1			
豊 野	(1) 1			
紀 周	(3) 1	1		
勝 明	(1) 1			
神 の 島	(1) 2			
兵庫 眞 洲	(2) 1			
芦 ノ 郷	(1) 1			
本 明 勇	(2) 1			
明 道	(1) 1			
芦 東	(1) 1			
和 鎮	(3) 1			
神 滝 本	(1) 1			
芦 明 徳	(1) 1			
眞 明 彰 化	(2) 1			
本 氣	(2) 1			
芦 明 照	(1) 1			
眞 伯	(1) 1			
合 計 (209)	26	15	4	3

月 例 統 計 (自令和4年1月1日) 至令和4年4月30日)